

福音主義と科学・自然神学・自助の精神*

—— デイヴィッド・リヴィングストンのアフリカ開発構想とその知的文脈 ——

鈴木 平

The article examines the intellectual sources of David Livingston's vision for "colonization" of Africa and its profoundly Scottish nature. Unlike the common view of Livingston as a most effective Christian advocate of Britain's colonization in Africa, his missionary travels started with entirely different purpose and vision. It was first inspired by his father's Evangelicalism, then nurtured by his working experience at David Dale's spinning factory in his hometown Blantyre, and theoretically strengthened by the work of the leading advocate of anti-slavery movement, Thomas F. Buxton. Livingstone not only succeeded Buxton's missing for Africa's civilization by Christianity and commerce, but also expanded it into a wider scheme of ultimate independence of African nations through British economic assistance in the name of "colonization". More significantly, behind Livingston's view of Africa did exist a theological view of nature that he had learned in his early years directly from Thomas Dick, a Scottish popular scientist and indirectly through Dick from Thomas Chalmers, a Scottish theologian and social reformer. The author attempts to prove that Livingston's Christian vision for Africa's future development was gradually formed in these Scottish intellectual contexts and was morally completed by his deep sympathy with the local people in Africa.

I. 問題の所在

デイヴィッド・リヴィングストン (David Livingstone, 1813-1873) は、19世紀のイギリスを代表する探検家、宣教師である。アフリカ各地で宣教活動を行いつつ、ヨーロッパ人として初めて全踏破距離8000kmにおよぶアフリカ大陸横断旅行に成功し国民的英雄となった。リヴィングストンは同時に、医師、自然科学者として、自由貿易と植民地化計画を軸とするアフリカ開発構想の提唱者でもあった。当時のイギリス宣教師たちの活動は「文化帝国主義 cultural imperialism」ないし「宣教帝国主義 missionary imperialism」¹⁾と考えられることが多く、リヴィングストン

の伝記研究やイギリス帝国史研究でも、彼の活動がヨーロッパ列強によるアフリカ分割のきっかけのひとつになったと考えるのが一般的である。たとえばA. ボーターはリヴィングストンの事業を「アフリカ争奪戦とその究極の結果であるアフリカ分割を予期する存在」²⁾として特徴づけている。

しかしリヴィングストンは、イギリスのアフリカへの帝国主義的進出を意図して宣教活動と探検に身を投じたのではなかった。むしろ研究史が教えるように、彼は1840年に「ロンドン宣教協会 London Missionary Society」に入会し宣教師となったが、この時期に出会った奴隷解放論者トマス・フォーエル・バクストン (Thomas Fowell Buxton) の

*論文審査受付日：2009年10月27日。採用決定日：2009年12月2日（編集委員会）

人道主義, 互惠主義によって深刻な影響を受けていた³⁾。バクストンは奴隷貿易反対運動の中心人物の一人であり, 1840 年 6 月 1 日に「アフリカ文明化協会 African Civilization Society」を設立し, とくに西アフリカの社会改革による奴隷貿易の根絶を目指して活動していた⁴⁾。彼はキリスト教化, 商業化, 文明化による西アフリカの社会改革で達成される奴隷貿易の廃止が, 人道的にはもとより経済的にもアフリカとイギリスの双方に利益があることを強調し広範な支持を獲得していた⁵⁾。リヴィングストンはロンドンでバクストンの講演を聴き, 感銘を受けた⁶⁾。その後彼が提案し続けたアフリカ開発構想とバクストンの計画との類似性から, リヴィングストンは純粋なバクストン主義 (Pure Buxtonism) 者とすら考えられるにいたっている⁷⁾。

さらにリヴィングストンの活動の背後には, バクストンの構想とは異なる思想系譜とその担い手たちの存在があった。それは, 19 世紀スコットランドの福音派教会を中心とした自然神学と科学をめぐる知的系譜である。リヴィングストン家は代々プロテスタントで, リヴィングストンの父はスコットランド教会に属する厳格なカルヴァン主義者だったが, 後に離脱しハミルトンの独立教会主義の教会へ移り, 他界するまでの 20 年間執事を務めた。そこはスコットランドの会衆派の, 伝統の起源ともいわれている「古スコットランド人独立派」(The Old Scots Independents) の教会で, 規模は小さいながら, ロンドン宣教教会の海外活動に多くの人材を送り出していた組織でもあった⁸⁾。ロンドン宣教協会は, 福音主義復興運動から直接に影響を受け 1795 年に設立されたニュー・ディセント (New Dissent) と呼ばれる新興団体だった。宗派にはこだわ

らず異教徒たちに神の福音を教え広めることを活動理念としていたが⁹⁾, 構成メンバーの大半は会衆派であり, リヴィングストンもその一人だった。

会衆派は 1843 年の「大分裂 the Disruption」によって福音派が設立した「自由教会 the Free Church」に含まれていた。この自由教会を創立したトマス・チャーマーズ (Thomas Chalmers, 1780-1847)¹⁰⁾こそ, リヴィングストン思想に間接的ではあるが影響を及ぼした人物であった。チャーマーズは工業都市グラスゴウの貧困問題の解決に取り組んだが, 貧困という社会問題は救貧法等の行政的手段によってではなく, キリスト教信仰を土台にした自助 (Self-Help) と慈善活動によって解決されるべきであるとする彼の主張は多くの支持者を生み, 大きな成果を上げていた¹¹⁾。同時に, 信仰と科学は衝突せず, 科学研究はキリスト教にとって有益であるとする¹²⁾チャーマーズの科学思想は, 同じくスコットランドの聖職者にして天文学者でもあり, チャーマーズの信奉者であったトマス・ディック (Thomas Dick, 1774-1857) を媒介として, リヴィングストンへと流れ込んでいった。

このように, リヴィングストンはこうしたとりわけスコットランド的な思想系譜の中に育ち, その大きな影響下にアフリカでの諸活動を展開したが, 一方におけるアフリカ文明化の遠大なヴィジョンと, 他方における, 彼の死後に展開したイギリスとアフリカとの関係をめぐる史実との間には, 大きな乖離が生じることになる。既存のリヴィングストン観は, 帝国の成長・発展という歴史の長期的現実への志向をリヴィングストン思想それ自体に中に読み込み, その思想を大英帝国の思想

的一源泉と見なすという問題性を多かれ少なかれ内包している。

リヴィングストン研究の中心地である英語圏では、探検家、宣教師としての彼の人生を詳細に描写する伝記研究が主なテーマとされてきたが、近年では、リヴィングストンを取り巻く時代状況や思想的背景とともに彼を再評価する伝記研究も進められている¹³⁾。リヴィングストンはアフリカから2000通以上の書簡を書き送り、膨大な量の日誌を残した。彼の手記研究もリヴィングストン研究の重要な一分野となりつつある。

そこで以下本論では、上のような思想系譜を担うリヴィングストンのアフリカ開発構想が、彼の同時代人、とくにアフリカの植民地化を主導した外交関係者、政治家等によって受容されるなかでいかに変質していったのかという問題を念頭に置きつつ、リヴィングストン自身の活動の本来の意図と思想的源泉を明らかにしたい。そのための研究手法としては、彼の書簡や日誌類等の実証研究の成果を取り入れる。リヴィングストンの宣教活動と探検、アフリカ開発構想の知的源泉を、彼自身の発言をもとに、同時代人の思想と比較しながら明らかにすること、そして、リヴィングストンの思想形成過程を、その源泉へさかのぼりながら解明すること、ここに本論の課題がある。

II リヴィングストンの活動に対する同時代の反応

そこでまず本章では、19世紀中葉以降のイギリスにおいて、リヴィングストンが実際に人々からどのように受け入れられ、いかなる社会的役割を果たしたのかを確認したい。リ

ヴィングストンの人脈は多岐に渡るが、本章では、彼が深く関わった宣教師と慈善活動家たち、王立地理学協会 (Royal Geographical Society)、そして政治家たちという三つの立場の人々に着目する。

まず第一に、宣教師と慈善活動家たちとの関係である。何よりも、リヴィングストンの名は昔も今もアフリカでの宣教事業と結びついているが、実際には、ロンドン宣教協会との公式の関係は1857年に終わっており、リヴィングストンの名はその後、彼の呼びかけにより設立されたオックスフォード・ケンブリッジ中央アフリカ宣教師団 (Oxford and Cambridge Mission to Central Africa) と結びつくようになった。この団体の派遣とアフリカでの活動は、当時イギリスで海外宣教活動や慈善活動に積極的だった人々に、リヴィングストンがどのように迎えられ、求められたのかを示す範例である。1859年の万聖節 (11月1日) から2日間、そしてその約50年後、リヴィングストンが他界してから約25年後の1907年12月に、ケンブリッジ大学内のセネット・ハウスで、オックスフォード大学とケンブリッジ大学が主催する共同会議が行われた。その主な目的は、1857年12月に同じくセネット・ハウスでリヴィングストンが行った講演を振り返り、彼の志を踏まえながら、オックスフォード・ケンブリッジ中央アフリカ宣教師団を結成、派遣すること、また、現地での活動や宣教師の役割について確認、検討することだった。

二つの会議の議事録を比較検討すると、どちらの会議の参加者たちもリヴィングストンの活動や提言を支持していることが分かる。会議では一貫して、アフリカでのキリスト教化、商業化、文明化の同時展開について議論

されており、その立場から提案されたアフリカでの諸計画が平和的かつ実践的であったことも注目される。神の摂理に自由貿易の根拠を据えつつ、奴隷貿易の廃絶と人道的で合法的な交易や綿産業を主軸とする国際貿易が提唱されるなど、現実問題を視野に入れた議論が交わされており、それは人々を動かす大きな力となっていた。

他方、半世紀を隔てて行われたふたつの会議の議事内容には変化も見られる。1907年の議事録には、リヴィングストンを偶像視し、イギリスのアフリカ進出とアフリカの植民地支配を是認するような帝国主義的な指向性が見られるようになる¹⁴⁾。これは、宣教活動と商業により、アフリカを文明化するという一大プロジェクトに行き詰まりが生じ始めていたこと、そして、リヴィングストンの死後、彼のアフリカ開発構想とは異なる方向へ、イギリスの対アフリカ政策が動き出していたことを暗示している。

第二に注目すべきは、王立地理学協会との関係である。1856年に 1 度目の帰還を果たしたリヴィングストンは、アフリカでの地理学上の偉業を称えられ、王立地理学協会から金賞牌を授与された。その後、協会は十数年にわたり彼のアフリカでの活動を財政的に支援した。1830年の設立当時においては、王立地理学協会は純粋に地理学の発展と普及を目指すアカデミックな組織だったが¹⁵⁾、しだいに、探検家や軍人、行政官、自然科学者たちとの情報交換を目的とする政府組織としての役割を強め、1850年代までには、イギリス国内で海外拡張政策をもっとも標榜する組織のひとつと評されるようになった¹⁶⁾。リヴィングストンの主著『南アフリカでの宣教旅行と探査』¹⁷⁾の献呈の辞は、その出版に尽力した王

立地理学協会会長ロデリック・マーチソン (Roderick Impey Murchison) に捧げられている。

リヴィングストンはマーチソンの計らいにより、ヴィクトリア女王の勅命によるアフリカ東海岸地方キリマネのイギリス領事、また、ザンベジ探検隊の隊長に任命された。政府や地理学協会から資金や人材の提供を受け、1858年にリヴィングストンは再びアフリカへ向かった。リヴィングストンは主著の出版以前の1854年ごろからマーチソンと親密に交流するようになり、以後マーチソンへ多くの手紙を送った。現在確認されているだけでおよそ92通存在するが、それらはいずれも長文のものが多く内容も詳細である。アフリカの地理、自然、動植物に関する情報、現地住民の様子、奴隷貿易の実態などが主な話題であった。リヴィングストンは自らの職務を果たすべく頻繁に手紙を書き送ったものと思われる。しかし彼のメッセージは、イギリスがアフリカへ進出する際、重要な現地情報として利用されることにもなった。

王立地理学協会が多くの探検家たちを海外へ派遣したのは、科学的知識への渴望によるところが大きかったとはいえ、探検事業と商業活動、イギリスの海外拡張政策は、無関係ではなかった。イギリス政府は、海外の諸地域を掌握することで将来的に得られる商業的、軍事的利益を意識していた。政府は積極的に地理学協会を支援し、アフリカの遠征事業に財政的援助を与えた。政府がリヴィングストンを領事として直接雇い入れたのも、この政策に沿ったものであったといわれている。リヴィングストンが同協会と密接な関係を保ったのは、彼の探検家としての知的関心によるものであったが、協会と政府との密接な関係

は、リヴィングストンが必ずしも明確に意識していたわけではないアフリカにおける帝國的諸権益の拡張という客観的役割を、彼のアフリカでの諸活動に与える結果となった。

第三に注目すべきは同時代の有力政治家との関係である。リヴィングストンは2度目の帰還の翌年に下院で行われた「西アフリカ英国植民地に関する特別委員会」(The Select Committee on the State of the British Settlements on the Western Coast of Africa)に呼ばれ証言を求められた。特別委員会以前から下院ではリヴィングストンの話題が取り上げられており、1852年から1872年にかけて、議事録に残る記録は少なくとも35回に及ぶ。リヴィングストンの死後も言及され続け、1950年代まで彼の名は議論にのぼっている。イギリス各地で行った講演と同様、特別委員会でもリヴィングストンはアフリカ開発構想について熱弁し、アフリカの可能性を語ったが、それは政府と王立地理学協会から援助を受けながら探検を行っていた彼が、今後の支援確保のために、政治家たちが集う特別委員会が格好の場だと考えたからである。リヴィングストンは現地の人々の生活と貿易の安全を確保するために海軍の出動を訴えたが、この訴えは、武力行使を伴う植民地擁護論とも解釈されうるものだった。事実、議長のチャールズ・ボウヤー・アダリー(Charles Bowyer Adderley)は、イギリス植民地の諸利益をリヴィングストンは語っていると考えた¹⁸⁾。出席者たちは、宣教活動の目的と成果に関するリヴィングストンの報告に耳を傾け、さらなる宣教活動を応援しつつも、イギリスの植民地や、そこでの武力行使の必要性に関する発言に強い関心を示している。リヴィングストンに期待されたことのひ

とつは、イギリスのアフリカにおける既存の、そして将来の植民地が、本国にとって有益であることを実証することだった。

ここで注意すべきは次の点である。たしかに、アフリカにおけるイギリスの領土拡張を望んでいた政治家たちの思惑と、リヴィングストンのアフリカ開発構想の内容は乖離していたが、両者の願望は呼称が同じでも互いに意図するところの異なっていた植民地という対象によって結びついた。リヴィングストンと同時代のイギリスの、とくに外交に関わった人々は、様々なかたちで彼を評価し、必要ともした。彼の志が継承され積極的に実践されたこともあれば、探検家としての彼の評判が利用されることも、また、リヴィングストンをアフリカ進出への協力者ととらえる見方もあった。そのため、彼の死後刊行された伝記の中には、正確な記述と誇張や捏造された表現が混在するものもある。首相パーマストンや外務大臣クラレンドンなど大物政治家たちともリヴィングストンは個人的に関わりを持ち、政府から多額の助成金を得て活動したため、結果として彼はアフリカ分割の歴史とともに評価されるようになった。

しかし、上に示したような彼と政府首脳との密接な関係は、その反面で、政府の帝國的野望と、彼の宣教師、探検家としての最深度のヴィジョンやアフリカ開発の構想、その思想的背景との深刻なズレを明らかにすることになる。

Ⅲ. リヴィングストンのアフリカ開発構想

奴隷貿易反対運動の中心人物として活動したバクストンは、奴隷貿易阻止のための海上封鎖の強化、奴隷貿易地域の部族長との奴隷

貿易廃止条約の締結、奴隷貿易に代替する綿花やパーム・オイル、麻などアフリカ産品の自由貿易の促進、そのためのイギリス人入植者によるモデルファームの創設を提言していた。彼はアフリカ文明化のために、イギリスの宣教師によるアフリカ人への道徳およびキリスト教教育の必要性を訴えたが¹⁹⁾、このような活動方針はアフリカにおける 3 つの “C” —キリスト教化、商業化、文明化 (Christianity, Commerce, Civilization)— の同時展開と呼ばれている²⁰⁾。バクストンは世界経済の中でアフリカが自立することを確信し、「アフリカは現地住民の力によって独り立ちできる」²¹⁾ と信じていた。彼の構想は、イギリスからの農業技術移転と宣教師による教育活動を中心としたアフリカ開発援助計画であり、その最終的な目標は、現地の聖職者と信者によって運営され、布教活動も独自に行われる経済的に自立した教会の設立にあった。そして、教会の経済的自立を促すうえでも商業を不可欠なものと考えていた。バクストンはアフリカ人とイギリスの入植者たちの共同居住地を植民地 (Settlement) と呼んでいる²²⁾。

1841 年、バクストンの計画は政府のプロジェクトとして実施され、大型外輪船と小型船とともに総勢 150 余名の探検隊がイギリスを後にしたが²³⁾、現地の厳しい自然条件等により彼の試みは失敗に終わった²⁴⁾。批判の矢面に立ったバクストンは心労がたたり 1845 年に世を去ったが、彼の提案は多くの宣教協会の活動方針として受け継がれた²⁵⁾。リヴィングストンの次の言葉は、上のようなバクストンの事業の事実上の継承者としての自覚を自ずと語り出している。「中央アフリカの現地住民たちは交易を心から望んでいる。しかし、現

在彼らが行える取引は、貧しい人々がひどく恐怖を感じている奴隷貿易だけなのだ。先の目的を支援すること、すなわち自由主義経済から生み出された生産物を消費するための流通路を開くこと、そしてキリスト教と商業を彼らに紹介することがもっとも熱望されている」「アフリカ人と交易することにより、私たちは奴隷労働と縁を切るべきである。そうすることで、私たちはすべてのイギリス人にとってまったく不愉快な習慣から脱却できるのだ²⁶⁾。」実際にアフリカで残酷な奴隷貿易の実態を目にし、アフリカ人までもが奴隷貿易に加担していることを知った彼は、アフリカ人が経済的に自立できるようになるために、アフリカ産品を輸出することによってなされる自由貿易を提唱した。リヴィングストンは死の直前まで河川調査を続けたが、それは彼が、河岸地域の開発を願い、産業と交易に利用可能な大河を捜し求めていたからだった。

貧しい家庭環境で育ったリヴィングストンは、当初はイギリスの貧民の移住先として、アフリカの植民地の可能性も考えていたが、探検を続ける過程でその考えに疑問を持つようになった。様々な階層と境遇の人々からなる入植者の大群はアフリカに真の利益をもたらすものにはならない。リヴィングストンは「私が述べるキリスト教的植民地とは…人身売買のための交易を根絶するために我々の全勢力を投入するという特別な目的を達成するための、キリスト教徒としての我々の特質が完全に移植された地のことである²⁷⁾」と述べ、優れた技術と学識により、選り抜かれたイギリス人の入植事業によるアフリカの文明化こそが、アフリカ人への真の福音となると考えた²⁸⁾。

リヴィングストンが理想としたアフリカの

植民地は、アフリカ人にキリスト教と商業を教え広めることにより現地の文明化を進める宣教地であるとともに、イギリス人の指導のもと、現地の人々が奴隷貿易に代る交易品を生産し、将来アフリカとイギリス双方に経済的利益をもたらすことが期待された共生農場としても構想されていた。そしてリヴィングストンは、様々な農業の中から綿栽培を植民地でもっとも有望な産業だと考えていた。リヴィングストンにとって植民地とは、イギリスからの入植者たちが技術指導をしながらアフリカ人とともに開墾を行うが、イギリスが統治権を持つのではなく、最初はイギリスの保護を必要としたとしても、最終的にはアフリカ人が自治権を持つべき地域だった。

すなわち、入植者たちが政治的支配権を要求すればアフリカ人はこれに反発するに違いない²⁹⁾、アフリカ人による自治と自活が可能となり次第、イギリス人は撤退するべきだと考えたのである。彼は言う。「植民地とともにあることは子供と一緒にいるのと同じようなものだ。彼らはしばらくの間は保護を受け、ひ弱さと愛着心から言われるままに従う。しかし時が経過すると、自ら考える権利を要求するようになる。従属を永続させようとする試みは必然的に憎しみを生み出すだろう³⁰⁾」。「私としては、アフリカの内陸部の人々に対して政府がいっさい干渉をしないことがもっとも望ましいと考えている。しかし奴隷貿易に関わっている人々の中にいて、私はそうとも言えなくなってしまったのだ。奴隷貿易が廃止され事態が変化すれば、アフリカに対する保護政策はやがて縮小されていくだろう³¹⁾」。

19世紀中葉のイギリスでは、植民地の保有は経済的に不利益と主張する植民地分離論

(「小英国主義」)が唱えられるようになったが、分離の対象は植民地に限定され、インドのような属領部分には適用されなかった³²⁾。実際には当時イギリスは、自由貿易さえ保証されれば、経済的従属下に置くものの必ずしも政治的支配をおこなわない非公式帝国を拡大していた。他方、武力の点で弱体な発展途上国に対しては、必要とあれば武力に訴えて自由貿易を強要する砲艦外交を辞さなかった。バクストンやリヴィングストンは、このような対外政策が推し進められた時代に活動していたが、彼らのアフリカ構想の内容は、植民地分離論とも自由貿易帝国主義とも合い交えないものだった。それはアフリカの人々の立場から考察されたもので、植民地におけるイギリスの利益は、絶対必要条件ではなく、期待はされたが副次的な位置づけであったという点が、同時代の植民地を巡る議論とは異なる特徴といえよう。

しかしながらここで以下のような疑問が生じる。それはまず、リヴィングストンはなぜ探検に固執したのかということだ。彼のアフリカ開発構想にとって宣教活動と探検は車の両輪だった。しかしリヴィングストンは資金難を理由に、1857年にロンドン宣教協会から離れ、一個人として宣教活動を継続しつつ肩書きとしては探検家へ転身した³³⁾。アフリカでの活動が経済的に困窮していたのであれば、本国で奴隷制反対運動に参加する道もあっただろう。なぜ彼は帰国を拒み、探検の道を選んだのだろうか。またその探検も、単なる遠征旅行ではなく、自然科学に対する豊富な知見と関心に基づく、詳細緻密な実地調査だったことも注目される。

くわえて、リヴィングストンがバクストン以上に植民地のあり方を力説した理由も不確

かである。彼もバクストンが主張した 3 つの “C” の実現を目指したが、そこにさらなる C (Colonization) を加えたと言ってもよいだろう³⁴⁾。しかし、西アフリカ英国植民地に関する特別委員会の事例が示すように、植民地という言葉は必ずしもリヴィングストンが思い描いたような地としては理解されない。現実にはバクストンのプロジェクトは失敗に終わっており、リヴィングストンもそのことを承知していた。それでも彼が計画を放棄せず、宣教地、そしてアフリカ開発構想の拠点ともいうべき植民地の創設を提唱し続けたのはなぜだろうか。さらに言えることは、植民地で行う産業についての選択である。当時綿は今日の石油に匹敵するほど重要な世界商品であり³⁵⁾、バクストンも綿栽培に着目していた。しかしアフリカには、綿のほかに、輸出品となりうる天然資源や農作物が豊富に存在している。それらの候補の中から、なぜリヴィングストンは綿の栽培を強く推奨したのか³⁶⁾。これらの疑問は、リヴィングストンにはバクストンから受け継いだ人道主義、互惠主義に基づくアフリカ開発構想だけではなく、彼独自の考えがあったことを示している。彼の動機や活動の全体像を把握する為には、バクストンとの関わりとは異なる思想的背景にも目を向けなければならない。

IV. イギリス自然神学と科学の知的系譜

リヴィングストンは主著の序章で、自分の生い立ちや少年・青年時代の経験について回想している。彼の父は、科学的な著述は宗教にもとるものであると信じており、リヴィングストンはそのような父と意見が合わず反抗的な態度を取ったため、ときには父から棒で

打たれることもあった。しかし彼はいう。「科学的な著述や旅行記はとくに楽しいものだったが、宗教的な本を読むことを嫌悪する心持ちは何年も続いた。しかし、たまたまディック博士の『宗教哲学』³⁷⁾ や『来世の哲学』³⁸⁾ などの立派な本を読む機会を得て、ディック博士が宗教と科学は互いに相親しいものであるという私の信念を強く裏付けていることを知り喜びを感じた。[中略] 我が救い主の償いによる救済についての理論を理解するのに困難を感じてはいなかったが、自分自身の事柄にキリスト教の教義をあてはめる必要を感じ始めたのはこの頃になってからだ。それは、‘色盲’の治療が可能ならば起きるだろうと思われるほどの、大きな変革だった³⁹⁾。」

10代後半のリヴィングストンの思想に転換をもたらしたトマス・ディックは、科学とキリスト教を融合し、天文学と実践哲学に関する多くの著作を残した自然科学者である⁴⁰⁾。ダンディで生まれスコットランドの分離教会で育ったディックは、チャーマーズと同様科学と宗教に大きな魅力を感じていた。彼は熱烈なチャーマーズの信奉者でもあり、チャーマーズが傾倒した問題は、彼にとって生涯で中心かつ永続的なテーマだった。

チャーマーズは 1817 年に『天文学講演』⁴¹⁾ を出版したが、これは世界の複数性 (Plurality of Worlds) とキリスト教との関係についてチャーマーズが行った 7 回の連続講演を書物にしたものだ。天体観測が進むにつれ、人間と同様の知性体が居住する天体が地球外にいくつも存在するという考えが広まっていったが、これとキリスト教信仰との融合が重要な論点となった。チャーマーズはこの問題に取り組み、地球外知的生命の存在論の細部にはほとんど触れないまま、それがキリ

スト教の信仰と両立することを証明しようとしている。このことは17世紀には論争と批判を巻き起こした地球外知の生命存在説が、19世紀のはじめにはすでに知識人の中で否定しようも無い常識となっていたことを示している。熱狂を巻き起こしたこの説教と、それに続く著書の出版に対する反響は大きく、もともと数学者として知られていたチャーマーズを19世紀前半の福音主義運動の先頭に立たせることになった⁴²⁾。

『精神と外界』でチャーマーズは、一個人の精神に対する他の精神の関係に注目し、「人間社会の仕組みのうちに神の知性の徴を見つけること」を同書のテーマとしている⁴³⁾。善悪を判断する良心(Conscience)は生まれながら人間に備わっているとし、「この良心の現象こそ、神の道徳的性質についての最強の論拠を、自然が我々に提示している」⁴⁴⁾という。チャーマーズは社会の政治的幸福、経済的幸福、知性と意志の関係などを論じ、さまざまところで神のデザインが知られると述べている。また『自然神学』では、キュヴィエに従い、地球上では革命的变化が繰り返され、そのたびに生物の大規模な絶滅と新たな創造があったという。進化論は明確に否定され、「種が互いに移り変わることはなく⁴⁵⁾」、繰り返し新たな生物を創造してきたのは「極めて多様で精巧な有機体の構造をもたらしたデザイナーの手、すなわち神の決定によると考えるほかはない⁴⁶⁾」と述べている。

福音主義は人を罪から救うため自らの子を遣わしたことによって示されている、神の無限の愛の深さと崇高な慈悲を強調する。ディックはチャーマーズと考えを共有しており、贖罪の教義を補強する理論として世界の複数性を主張した⁴⁷⁾。ディックの最初の著書『キリ

スト教哲学者 (*The Christian Philosopher; or, the Connection of Science and Philosophy with Religion*)』の主題は、副題の「科学、哲学と宗教の結合」によく示されている。すでにこの中で世界の複数性を窺わせる表現が多く見られる。例えば「我々を爽快にし、元気付け、また我々の土地に活力を与える…」のにちょうどよいように太陽の大きさや距離を神が創造したことに対して、神の知恵を賞賛している。また、「すべての恒星は、[中略] 惑星が構成する世界系の中心であり、神の働きはそこにおいて無限に多様で、我々が属している系において以上に顕著であろう」という⁴⁸⁾。リヴィングストンが感化された『来世の哲学』⁴⁹⁾では、世界の複数性の議論がもっとも大きな役割を果たしている。「我々の不死なる魂は永遠に続く時間の大部分をこれらの他世界の風景や歴史の探求に捧げるのである」と述べ⁵⁰⁾、ディックはこの書物をチャーマーズへ献呈している⁵¹⁾。

ディックの議論には、天文学から生まれてきたというよりも、彼自身の多少奇抜な宗教的精神に由来するものもある。それでも、天文学上の情報を十分持っていたディックは多くの知識人へ影響を及ぼした⁵²⁾。彼はダンディの近くに天文台を完備した大きな家を自分の設計で建てたが、幾人もの著名人たちがディックと会うためにそこを訪れた。リヴィングストンはアフリカからディックへ数通の書簡を送っている。1843年の書簡では、ディックのおかげで自ら確信を持つことが出来るようになり、自分に待望されている生涯の仕事を神の御心が示していることを悟ったという。神の恩寵を理解することができるようになり、神の福音を世界へ伝え広めるために生きることを決めたリヴィングストンは、「ディック

博士に対する感謝の念は、まことに筆舌に尽くし難い」と述べている⁵³⁾。手紙を受けたディックは、リヴィングストンについて、「真の信仰心から、非常に素晴らしい活動を実践しており、そのようなことは他の誰もが出来ることではない」と称えた⁵⁴⁾。リヴィングストンが探検家として一躍有名になる10年前のことだった。

リヴィングストンの日記や探検記の中から、チャーマーズやディックの世界観と通じる言説を多く見出すことが出来る。アフリカの自然のなかに創造主の叡智を感じ続けたリヴィングストンは⁵⁵⁾、大量の白蟻が倒木や枯れた草木を分解することにより、アフリカの熱帯林の肥沃な土壌が保たれている事実を例に、次のように述べている。「万有を通じて行われている驚嘆すべき適応と、そのような知恵と巧妙さを以って行われている多種多様な営みを見る時、被造物主の考えていることがまことに不器用なものに思える。我々は造物主の手仕事を直接目にすることが出来る。神は全宇宙の中で唯一無二の力である。神の素晴らしい計画のもと、我々全人類は生き、活動し、存在しているのだ⁵⁶⁾。」天文学にも造詣が深かったリヴィングストンは、ケンタウルス座の恒星で三重連星のケンタウルス座アルファ星を例に出し、宇宙で繰り広げられている規則正しい周期運動に神の偉大さを感じた。そして、部族同士の抗争や宣教活動上の問題に、神の御業に対する考え方を重ね合わせた。「天空の星たちは、本来放っておけばぶつかりあうものなのに、神がそうならないようちょうど良く配置している。[中略] アフリカの人々を教育指導することは非常に難しい。彼らは基本的に我々を馬鹿にしているのだ。世の中が発展していく過程で、部族たちもそう

であるように、人の集団というものはぶつかりあうものだ。神のみがはっきりと将来を予見することが出来るのだ。」宇宙の秩序を保っている神は、人に対しても同じように計ってくれるだろう。どうすれば衝突せずに人々が交流できるのか、神が導き示してくれるだろうとリヴィングストンは考えていた⁵⁷⁾。

ディックに傾倒していたリヴィングストンにとって、アフリカで目にした驚嘆すべき世界と自然の仕組みは、宇宙と同様に、調べれば調べるほど精巧かつ精妙で、人間の思考力や技術を遥かに超えていると思われた。世界にこのような精巧な仕組みや因果が存在するのは、人知を超越した者の設計が前提になれば説明がつかない。リヴィングストンにとって探検は、その高度な目的的な仕組みと存在のありようでまさに神の存在を証明している自然界を自らの足で探索調査することであり、また、福音伝道でアフリカ社会に平和と進歩をもたらすことができるという宣教師としての信念に、自信を与えるものでもあった。

またリヴィングストンは、彼の師でもあり、創造論に基づく生物学思想の立場から、進化論をめぐりチャールズ・ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-1882) と激論を交わしたことで知られる、19世紀イギリスを代表する動物学者リチャード・オーエン (Sir Richard Owen, 1804-1892) から影響を受け、チャーマーズと同様に反進化論の立場をとっていた。リヴィングストンは人類の不可分性を支持しており、固定観念に影響され人種間の差異を認める見地こそ、奴隷制度存続させている原因のひとつだと考えた。そのため、『種の起源』に関心を抱きつつ、奴隷制度に理論的根拠を与えることが懸念された進化論を受け入れることは出来なかった。

リヴィングストンの時代、自然界を研究することは神に対する信頼を支持し統合することだった。イギリスの至る所で研究団体や哲学協会を設立させたスコットランド人たちは、そのような自然科学を信じていた。自然科学は科学者たちの気持ちを高め、創造主の御業に対する畏敬の念を深める神の科学だった。リヴィングストンは敬虔なキリスト教徒だが、時代思潮が科学と神学との関係を了解していたので彼は純粋な科学者でもあり、そこには何の矛盾もなかった。

V. リヴィングストンにおける自助と共生の精神 — デイヴィッド・デールの紡績工場と工場共同体 —

リヴィングストンはグラスゴウ郊外にある街ブランタイアの綿紡績工場で、10歳のときから約10年間糸継ぎ工（断糸継工piecer）として働き、工場併設の夜間学校で学んだ。ブランタイアはラナークシャー南部を流れるクライド川の近くにたたずむ街だ。1784年、水力紡績機の発明者リチャード・アークライト（Richard Arkwright, 1732-1792）と、王立銀行グラスゴウ営業支配人にして起業家でもあったデイヴィッド・デール（David Dale, 1739-1806）は、クライド川周辺地域を調査し、水力を利用した紡績工場の建設に着手した⁵⁸⁾。2人は購入した用地をニューラナークと名づけたが、そこは以後、スコットランドの単一事業としては過去最大の規模を誇る紡績工場となった。デールはカトリンとブランタイアにニューラナークの分工場を建設した。ブランタイアの工場では当時最新の紡機ジェニー紡機が55台稼動し、リヴィングストンが働いた場所が、このブランタイア紡績工場の

ジェニー紡機部門だった。ニューラナークはハイランド移民に対して、1791年には約100名、翌年には約200家族に住居と仕事を提供した。デールは3つの工場設立の後、ハイランドに産業、富、雇用を創出するという目的で遠隔地にも紡績工場を建設し、多くの移民を受け入れた。また、グラスゴウ市民病院や王立診療所の役員、後援者としても活動した⁵⁹⁾。

慈善事業、社会事業としてデールの功績がもっとも顕著に示されたことのひとつは、その教育活動だろう。繊維業界の経営者たちは安い労働力を求めて多くの子供を雇った。デールの工場でも働き手の中心となったのが子供たちだったが、ラナークや周辺の教区、エディンバラやグラスゴウの孤児院から来た子供たちが多く含まれていた。デールの紡績工場には学校と寄宿舎が併設され、工場の子供たちだけではなく、日中は地域の子供たちにも教育の場が提供された。子供たちは清潔な衣服を与えられ、規則正しく健康的に生活するように指導されていた。実践されていた教育も充実しており、イギリスで幼児教育を含む系統だった進歩的な学校教育の体制が工場共同体に作られたものとしては、デールの工場併設学校が始めての試みだったといわれている⁶⁰⁾。後にニューラナークは、デールの義理の息子であったロバート・オーエン（Robert Owen, 1771-1858）によって引き継がれた。オーエンのプロジェクト、'学校および人格形成のための新教育機関'の設立は高く評価されたが⁶¹⁾、それはオーエンがデールの教育理念を継承し発展させようとしたものだった。オーエンは協同組合などの事業も手がけ、後にアメリカへ渡り、私財を投じて共産主義的な生活と労働の共同体（ニューハーモニー村）

の実現を目指した。

リヴィングストンが工場で働き始めたのはデールが他界して 7 年後だったが、工場の体制と併設学校での教育システムはデールの頃と変わらなかった。彼は、工場の労働はひどく骨が折れるものだったけれども、そのときの経験が自分を支えていると述べている⁶²⁾。「教師はみな親切で温和な人たちで、工場から援助を受けながら望ましい教育を行っており、多くの人々が恩恵をこうむった。当時の仲間たちのなかには、学校に入学したときと比べてはるかに高い社会的地位についている人もいる。このような機関がイギリス中に創設されれば、貧しい人々に永遠の恵がもたらされるだろう⁶³⁾。」リヴィングストンがディックの書物を手に目を輝かせたのは、ちょうど彼が工場併設学校で学んでいた頃であり、彼は労賃をこつこつと貯めてディックの書物を買ったのだった。

敬虔なキリスト教徒でもあったデールは、1760 年代以降スコットランド教会を離れ、宣教活動に重点を置く「古スコットランド人独立派」のラナークシャーにおける設立メンバーとなっている。歴史家アンガス・カルダーは、「博愛的事業家にして会衆派のデールは、ブランタイアから数マイル離れた地に住んでおり、リヴィングストン家にとって重要な隣人だった」ことを指摘し、「リヴィングストンの社会的良心はこの時期に形成されたといっ

てよいだろう」と述べている⁶⁴⁾。事実彼は、「私は紡績工場で働いていたころを振り返り、その時期が、私の若い時の非常に重要な部分をなしていたことを感謝せずにはいられない。私は生まれ変わったとしても、過去とまったく同じように質素な生活環境のなか、つつましく実直に自己鍛錬に励むような生き方から

VI. 結び

イギリス、スコットランド福音主義の自然神学と科学の中で育ったリヴィングストンは、その大きな影響下で自由貿易と植民地化計画を軸とするアフリカ開発構想を提唱した。本論は、このような知的文脈をもつリヴィングストンのアフリカ開発構想が、同時代のとくにアフリカと深く関わった宣教協会や慈善家、外交関係者や政治家等に受容される中でいかに変質していったのかという問題意識を持ちつつ、彼の活動の本質的意図と思想的源泉を明らかにすることを課題とした。本論での検証を通じ、以下の三つの事柄が明らかとなった。

リヴィングストンのアフリカ探検は、科学に対する関心と知見に基づく探索調査であったと同時に、神の恩寵を確かめ神への畏敬の念と信仰を深めるキリスト教徒のフィールドワークでもあった。探検をやめることはフィールドワークをやめることをも意味する。リヴィングストンのなかには、どのような境遇においても探検を継続するという選択肢しかなかった。死をむかえるまで続けられた遠征旅行は殉教の旅となった。リヴィングストンのアフリカ開発構想は、バクストンのアフリカ救済策を土台とし、植民地化計画が強調されたものだったが、彼がそのようなスローガンを掲げ活動することが出来たのは、彼が長年過ごした工場共同体での経験によるところが大きかった。リヴィングストンの思想は、工場共同体で培われた慈善や相互扶助、自助の精神、スコットランド人としての誇りという素地をもち、トマス・ディックの宗教、科学思想を

きっかけに大きく転換し、さらに自然科学研究を通じリチャード・オーエンの生物学思想から影響を受け、ほぼこの段階でその基盤を確立した。すなわち、明らかになった第1の事柄は、リヴィングストンの思想と活動を本質的に理解するためには、従来の研究では見落とされがちな彼の渡航以前の知的コンテクストに注目しなければならないということである。

しかしリヴィングストンの構想は本来的な起源と思想系譜を離れ、イギリス帝国史上あらたな社会的役割を果たすことになった。その象徴的史実は、彼を発見、支援したウェールズ出身のジャーナリスト、ヘンリー・モートン・スタンリー (Henry Morton Stanley) が、レオポルド2世のコンゴ自由国の植民地化に直接助力したことである。リヴィングストンも著作や講演を通じて植民地化計画を提唱し、支持を得るため積極的に政府や為政者と関わり、多額の援助を受けた。死後彼の構想は列強のアフリカ争奪の道徳的根拠ともなった。従ってリヴィングストンがアフリカ争奪と直接間接に関わり、帝国文化の実践家としての役割を果たしたという事実は認めなければならない。これが第2の事柄である。

リヴィングストンはイギリス社会の進歩に対し楽観的見解を持っていた。神無き人道主義や人種主義がどう理解され実践されるか、博愛的な宣教主義と善意にはどのような限界があるのか、活動の根幹を成す思想を疑うことはなかった。ヴィクトリア時代の申し子にして、過去の時代の生き証人でもあり、頑ななまでに理想を追い続けたリヴィングストンの知的文脈は、彼の偉大さと悲劇の所以となった。明らかになった第3の事柄とは、彼をリヴィングストンたらしめたのは、人格に起因

するものも当然だが、何よりも時代思潮だったということである。世界の複数性論やキリスト教的世界観に基づく経済思想も、また、福音主義の互惠主義、人道主義に基づく宣教思想やユートピア的共同体思想も19世紀のイギリスに厳然と存在し、多くの人々がそれらを理解し共有しており、外交政策をも動かして他国へ影響を及ぼすほど社会的に機能していたというその事実の重みを、それらの思想の是非を問うのとは別に、歴史認識として踏まえていなければならないということ、リヴィングストンは体現している。

注

1) ドライバーは、リヴィングストンとスタンレーは、スタイルは異なっていたが両者とも文化帝国主義 (cultural imperialism) を体現したと人物だと考えている (National Portrait Gallery(1966), *David Livingstone and the Victorian Encounter with Africa*, p.131)。ノールは「宣教帝国主義 Missionary Imperialism」という語を用い (Knorr, Klaus Eugene(1963), *British Colonial Theories 1570-1850*, Frank Cass, p.338), 並河は、福音主義者たちも人種主義的な人類学から影響を受け、アフリカ人保護のためヨーロッパ人が指導的立場につくことを宣教活動の前提としたとする (並河葉子 (1996)「西アフリカにおけるチャーチ・ミッショナリー・ソサエティーの活動とイギリス福音主義」『西洋史学』181号, 日本西洋史学会, 34頁)。毛利は、聖書の教義に基礎を置くコプデンの自由貿易主義が不適者排除の正当性を主張する生存競争の論理に立脚したと指摘する (毛利健三 (1986年))『自由貿易帝国主義』東京大学出版会, 46-47頁)。

2) Porter, Andrew (2004), *Religion versus Empire? British Protestant Missionaries and Overseas Expansion, 1700-1914*, Manchester

- University Press, p.184.
- 3) Jeal, Tim(1994), *Livingstone*, Pimlico, pp.22-23.
 - 4) バクストンは国会議員としてウィルバーフォース (William Wilberforce) の奴隷制廃止運動の後継者であり, 1833年の公式な廃止はバクストンの努力によるところが大きい。(Buxton, Thomas Fowell(1849), *Memoirs of Sir Thomas Fowell Buxton, Bart*, John Murray, pp.66-81)
 - 5) 並河, 前掲, 34頁。バクストン自身はスコットランド人宣教師フィリップ (John Philip) から影響を受けた。フィリップは南アフリカでの現地調査をもとに『南アフリカでの調査』(1828)を出版した。フィリップは労働を通じての教育活動の必要性を説いたが, バクストンはフィリップのそのような思想をキリスト教化, 商業化, 文明化の同時展開と表現した (Ross, Andrew(2002), *David Livingstone: Mission and Empire*, Hambledon, 2002, pp.241-242., National Portrait Gallery, op.cit. p.98)
 - 6) Jeal, op.cit., pp.22-23.
 - 7) Barclay, Oliver(2001), *Thomas Fowell Buxton and the Liberation of Slaves*, The Ebor Press, p.3, p.138.
 - 8) National Portrait Gallery, *David Livingstone and the Victorian Encounter with Africa*, London, 1996, p.90.
 - 9) ロンドン宣教協会は協会設立のときに基本原則を次のように示している。「様々な宗派に属する神の人々の団体として, この偉大な仕事を遂行するにあたりもっとも望まれることは, 将来の不和の原因を可能な限り未然に防ぐことだ。我々の目的は, 異教徒たちに, 長老派や独立派, 監督制などの教会や政府の様々な形態ではなく, 神聖なる福音を伝えることだ。」(Roger Martin, 'The Place of the London Missionary Society in the Ecumenical Movement', *Journal of Ecclesiastical History*, Vol.31, No.3, 1980, pp.289-290.)
 - 10) チャーマーズの経済思想については以下を参照されたい。深貝保則 (1997年)「神学的経済学の商業社会把握—マルサス, チャーマーズ, ホエイトリー—」『マルサス学会年報』, 6号。深貝保則 (1997年)「チャーマーズにおける人口3区分論と生産構造把握」, 『商経論叢 (神奈川大学)』, 32巻4号。有江大介 (2005年)「自然神学の幸福な世界」『エコノミア』, 第56巻第1号。
 - 11) 津崎哲雄 (1989年)「トーマス・チャーマーズの信仰と実践」, 『基督教社会福祉学研究』, No.21, 日本基督教社会福祉学会, 9-21頁。
 - 12) 松永俊男 (2005年)『ダーウィン前夜の進化論争』, 名古屋大学出版会, 104-105頁。
 - 13) 定評ある伝記研究として以下の文献があげられる。Jeal, op.cit., Mackenzie, Rob(1993), *David Livingstone: the truth behind the legend*, Eastbourne, Kingsway Publications., National Portrait Gallery, op.cit., Ross, op.cit. リヴィングストン文書を収めた基本文献として以下がある。Clendennen, Gary W. and Cunningham, I.C(1979), *David Livingstone: a catalogue of documents*, Edinburgh, National Library of Scotland for the David Livingstone Documentation Project., Cunningham, I.C. (1985), *David Livingstone: a catalogue of documents: a supplement*, Edinburgh, National Library of Scotland for the David Livingstone Documentation Project., Universities' Mission to Central Africa(1908), *David Livingstone and Cambridge: A Record of Three Meetings in the Senate House: with Livingstone's Speeches of Dec. 4 and 5, 1857*, Westminster, p.71.
 - 14) Universities' Mission to Central Africa, op.cit. p.71.
 - 15) 王立地理学協会の設立事情については, Driver, Felix(2001), *Geography Militant: Culture of Exploration and Empire*, Oxford, Blackwell, p p.27-28.を参照。
 - 16) National Portrait Gallery, op.cit., p.121.
 - 17) Livingstone, David(1857), *Missionary travels and researches in South Africa including a sketch of sixteen years' residence in the interior of Africa...*, John Murray.

- 18) Irish University Press(1968), *Irish University Press Series of British Parliamentary Papers...*, 1865(412) V, Shanon, pp.230-233.
- 19) Buxton, Thomas Fowell(1968, first published 1839), *The Slave Trade and Its Remedy*, Dowsons of Pall Wall, pp.301-343.
- 20) Barclay, op.cit., p.3, p.138.
- 21) Buxton, op.cit., p.302.
- 22) Ibid., p.516.
- 23) リヴィングストンは1841年にホッテンロット族の改宗に成功した事例を挙げ、宣教活動が有望であることを本国へ伝えたが、それを知ったバクストンはおおいに励まされたという (Barclay, op.cit.,p.77)。
- 24) Ibid., pp.120-123.
- 25) Holmes, Timothy(1993), *Journey to Livingstone, Exploration of an Imperial Myth*, Edinburgh, Canongate Press, p.62.
- 26) Monk, William(1858), *Dr. Livingstone's Cambridge Lectures*, Deighton Bell and Co, p.21.
- 27) Universities' Mission to Central Africa, op.cit., p.43.
- 28) Jeal, op.cit., p.223.
- 29) Ibid., p.384.
- 30) Ibid.
- 31) Irish University Press, op.cit., p.232.
- 32) 平田雅博 (2000年)『イギリス帝国と世界システム』, 晃洋書房, 116-117頁。山田秀雄 (2005年), 『イギリス帝国経済研究』, ミネルヴァ書房, 32-33頁。
- 33) Wallis, J. P. R(1956), *The Zambezi expedition of David Livingstone: 1858-1863: 2 volumes, the journals continued with letters and dispatches there from*, Chatto & Windus, vol.1, xviii.
- 34) Holmes, op.cit.,p.62.
- 35) National Portrait Gallery, op.cit.,p.93.
- 36) Monk,op.cit.,pp.46-47.
- 37) Dick, Thomak(1826), *The philosophy of religion, or, An illustration of the moral laws of the Universe*, E.and G.Marriam.
- 38) Dick, Thomas(1828), *The philosophy of a future state*, William Collins.
- 39) Livingstone, op.cit., pp7-8.
- 40) 『キリスト教哲学書』は成功を収め、その後ディックは重要な著作を少なくとも9冊執筆したが、これらすべてにおいて世界の複数性は重要なテーマとなっていた。マイケル・J・クロウ (2001年) (鼓澄治, 吉田修, 山本啓二訳)『地球外生命論争 1750-1900—カントからロウエルまでの世界の複数性をめぐる思想大全』, 工作舎, 349頁。
- 41) Chalmers, Thomas(1817), *A Series of Discourse on the Christian Revelation, Viewed in Connection with the Modern Astronomy*, J. Smith.
- 42) 長尾伸一 (2005年)「19世ブリテンの「世界の複数性」論争」,『経済科学』, 第53巻第3号, 3-4頁。
- 43) Chalmers, Thomas(1883), *On the Power, Wisdom and Goodness of God as Manifested in Adaptation of External Nature to Moral and Intellectual Constitution of Man*, 2vols., William Pickering, p.6.
- 44) Ibid., p.72.
- 45) Chalmers, Thomas(1836), *On Natural Theology*, William Collins, p.245.
- 46) Ibid., p.249.
- 47) Astore, William. J.(2001), *Observing God: Thomas Dick, Evangelicalism, and Popular Science*, Aldershot, pp.77-78.
- 48) Dick, Thomas(1856), *Christian Philosopher; or, The Connection of Science and Philosophy with Religion, From the Last London Edition*, (Complete Works of Thomas Dick Vol.2(1856), Kessinger Publishing Co, 2003, pp.31-35)
- 49) Dick, Thomas(2003), *The Philosophy of Future State*, (Complete Works of Thomas Dick Vol.1(1856), Kessinger Publishing Co, 2003.)
- 50) マイケル・J・クロウ, 前掲, 351頁。
- 51) Dick, op.cit.,1858, vi.

- 52) 例えば、望遠鏡と精度科学機器の発明で世界的成功を収めたジョン・アルフレッド・ブレイシャー (John Alfred Brashear) はディック宅を訪問している。ブロンテ (Emily Jane Bronte) はディックの『天界の風景』 (*Celestial Scenery...*, E.C. & J. Biddle, [1837], 1845.) から着想を得て自分の詩を豊かにした。アメリカの観測天文学者バーナード (Edward Emerson Barnard) は、ディックの著作に導かれて天文学の道を志すようになったと証言している。(Brashear, John Alfred(1913), "A Visit to the Home of Dr. Thomas Dick", *Journal of the Royal Astronomical Society of Canada*, Vol. 7, p.19., マイケル・J・クロウ, 前掲, 357頁。)
- 53) David Livingstone to Dick, 7 July 1843, National Library of Scotland Manuscript, 20314, ff22-23.
- 54) Astore, op.cit. p.129. ディックが死去した 1857 年 7 月に帰還中だったリヴィングストンは、同年 9 月にダンディ市民の前でディックを追悼する講演を行った。彼は、『来世の哲学』を読みあらゆる重要な事柄について啓蒙されたこと、それは自分のみならず人々全てに関わる事柄で、神の贖罪と来世の真実について誰もが理解しなければならぬと説き、拍手喝采をあげた (Ibid., p.153)。
- 55) アフリカの人々が使用している薬草の調査と収集に力を注いだリヴィングストンは、「キニーネの原料は少量ながらテテでも得られるし、センナの林やキリマネの三角州でも得られるとのことだ。熱病の治療薬が、それをもっとも必要としている土地に、もっとも多量に産出される。これはまったく神の配剤と思われる。」 (Livingstone, 1857, p.694.)
- 56) Ibid., p.579.
- 57) Livingstone, David(1960), *Livingstone's Private Journals 1851-1853*, University of California Press, 1960, pp.80-81.
- 58) Davidson, Lorna(1993), *The Story of New Lanark*, Lanark, p.4.
- 59) Ibid., p.9.
- 60) Ibid., p.8.
- 61) Ibid., p.17.
- 62) Livingstone, 1857, p.9.
- 63) Ibid., p.7.
- 64) National Portrait Gallery, op.cit., p.90.
- 65) Livingstone, 1857, p.10.
- 66) Davidson, op.cit., p.3.
- (慶應義塾志木高等学校)